

親鸞の基本的立場は『教行信証』『教巻』等にも示されるように、本願が説かれた『無量寿経』こそ真実の經典であるとの立場に立っている。また親鸞独自の浄土三部経の見方としては、三部経それぞれを第十八願・第十九願・第二十願を開説したものとし、そこに真・仮の別を見ていることである。さらに仮とされる『観無量寿経』・『阿弥陀経』に隠頭をもつて見ていることも大きな特長である。

まず親鸞の基本的立場を確認しておく、親鸞は『浄土文類聚鈔』（真聖全二、四五四頁）に「三世諸如来出世正本意唯説阿弥陀不可思議願（三世のもろもろの如来、出世のまさしき本意、ただ阿弥陀の不可思議の願を説かんとなり）」とあることから分かるように、積尊に限らず全ての仏が弥陀の本願を説くことを本意として見ている。親鸞は、『無量寿経』を真実教とする根拠として、仏の威儀（相好）や仏自身の言説をあげている。

また『教行信証』には多くの經典が引用されているが、引用に際して通常の読みとは異なる読み方をしたり、原意の意味とは異なる引き方をしたり、また時には經典の文言を入れ替えたりしながら、本願義を顕彰した經典として引用している。

そこで『教行信証』に引用される『涅槃経』や『悲華経』等について、經典の原意と引意を比較しながら、親鸞の引用意図を探ることによって親鸞の經典観を見ていきたいと考えている。『涅槃経』は「行巻」に四文、「信巻」に十二文、「真仏土巻」に十三文、「化身土巻」に四文、合わせて三十三文の引用がある。「信巻」末の逆謗撰取釈下では、五逆罪・謗法罪・一闡提の者が本願の正所被の機であることと、それらが救われていく相状が示されているが、そこには『涅槃経』が引かれており、五逆罪・謗法罪・一闡提の者が弥陀の本願によって成仏できることを示している。「信巻」に引用された現病品では、經典の文言の順番を入れ替えて、原意では「声聞・縁覚も仏・菩薩の法を聞けば阿耨多羅三藐三菩提心を発すことができる」との意となるところを、親鸞は文言を入れ替えることにより、「謗法罪・五逆罪・一闡提の者も阿耨多羅三藐三菩提心を発すことができる」との意になるようにしている。

また『悲華経』は「行巻」に二箇所、「化身土巻」に一箇所引用されている。「行巻」大行釈に引用された『悲華経』の文は、無諍念という転輪聖王が宝海という大臣の勧めによって五十一の誓願を起こした中の第四十五願が引用されている。「行巻」の引意は、「浄土三部経以外の經典においても、阿弥陀仏の救済が讃嘆されていることをあらわすことにあるものと思われる。五十一の誓願は当面は無諍念という転輪聖王の誓願であるが、その転輪聖王が宝蔵如来より「今、汝の字を改め無量清浄と為さむ」授記されていることを考えれば、この『悲華経』の引用は、正しく原意通りそのまま引用されていると言える。

このように『涅槃経』や『悲華経』の原意と引意を探ることにより、親鸞の經典観を窺ってみたいと考えている。

キーワード

〈無量寿経〉〈本願〉〈浄土三部経〉